

---

# 無機物の召喚士

ライナー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無機物の召喚士

### 【Nコード】

N2785K

### 【作者名】

ライナー

### 【あらすじ】

起きたらそこは異世界でした・・・

剣と魔法そして「召喚」が盛んな異世界で不思議な力を持った主人公となぜか喋れるようになった飼いネコが活躍する物語です。

第0話：異世界へ（前書き）

駄文ですがよろしく願います

## 第0話：異世界へ

「やっと終わったぜえ〜・・・」

いつもより5時間も長いバイトを終わらせ、その青年

つきしまれ  
月島玲

人は一言呟いた。  
アパートから自転車で10分ぐらいで着く飲食店で玲人は働いてい

た。  
いつもなら午後3時に終わるはずが、2つ年上の先輩が「急用が出来たんで今日無理ッス！」とバイト先の店長に連絡があった・・・  
それでとばっちりを受け「お前あいつの分まで働け」と言われた。  
ものすごい形相で・・・

「あんな顔されちゃ断れないもんな・・・ハア・・・」

いそいそと着替え「お先に失礼します」「おい〜っすお疲れ〜」  
と軽い挨拶を交わし自転車に乗って帰宅する。  
外は真っ暗だ。

「うわっ・・・真っ暗じゃねえか・・・ライト壊れてるのに」

ライトが壊れているので10分多く時間をかけて自身の部屋がある  
アパートへと向かう。

3回ほどコケたのは言うまでもない

「ただいま」

帰宅するとすぐさまベットにダイブする。

ほぼ半日も働きづめだったので疲れがピークに達していた。

「あゝ・・・疲れた・・・明日は休みにしてもらったからゆっくり休もう・・・」

風呂は明日でいいやと思いつつながら仰向けになり目を閉じる・・・

「ニャー」

だが、聞きなれた鳴き声に目を開ける。そこには1匹の三毛猫（みけねこ）が彼の方を尻尾を横に振りながら見ていた。

彼は思い出したかのようにネコの名前を言った。

「レオ・・・」

玲人に名前を呼ばれたネコの名前は”レオ”・・・1年前にバイトに行く途中のゴミ捨て場に捨てられていたのを彼が拾った。

大のネコ好きである彼は、「お持ち帰りいいいいいいいいイヤッホオオオ!!!」などと言いつつながらアパートに持ち帰ったのだ。

勝手に持ち込んだため大家さんに怒られてしまったのはいい思い出だ。

ちなみにメスである。

「ニヤー」

名前を呼ばれたレオは、自分の名前を呼んだ主人の懐に入り込み再び「ニヤー」と鳴いた。

その行為に和みつつ

「ゴメンな・・・今日は先輩が休んだせいで遅くなっただんた・・・悪い」

「ニヤー」

帰宅が遅くなったのを謝ったが、レオはいつもの気に入っている場所がようやく戻ってきたのが嬉しいらしく気持ち良さそうに寄り添っている。

適当に愛撫するとゴロゴロを喉をならし尻尾で腹を撫でてくる。

「さて・・・ちょっと早いけど寝るかすみレオ・・・」

おや

視線を天井にもどし目を閉じる。

明日はどうしようかなと思いつながら・・・

だが、彼の日常は非日常へと移動する。

「ミツケタ・・・」

「チカラヲ・・・モツモノ・・・」

「ワレヲ・・・ハカイセシ・・・モノ」



第0話：異世界へ（後書き）

小説はムズイですorz

**第1話：起床そして襲撃（前書き）**

変な文になってます m ) | | ( m

## 第1話：起床そして襲撃

「ふわあああああ

・・・」

朝6時いつも通りに起きる。昨夜、風呂に入らなかったためなのか私服のまま寝てしまったせいなのか若干汗臭かった。そして鳩尾あたりにもう一つの体温・・・レオだ。

彼はレオが起きないように上半身をゆっくりおこしてまだ眠い目をこすりながらベット近くの窓にかけられているカーテンを開けようとする。

「あれっ？」

だが、窓があるはず場所には何もなかった。むなしく右手が空をきる。

「はい？」

なぜ窓がない？そんな疑問が頭に浮かぶ・・・あたりを見回すと、広大な草原が広がっていた。

「草・・・原？・・・」

「ハア！？」

あまりにもありえない出来事に思わず声を上げ飛び起きる。

一晩の間に自分の部屋から見たこともない草原に移っているのだ無理もない。

そして必死に思考を巡らし一つの結論に至った。

「そうか！これは夢だ！夢に違いない！おっしゃ！起きろオレ！！」

バチーン！

「いてえ……」

目覚ましに自らの頬を引つ叩いたが、当然のごとく起き上るのは頬だけである。

だが、今ので随分と冷静になれた。

「夢ではないと……じゃあどこどこだ？なんでこんなところにいる？」

再び長い思考に入るが、ある言葉が頭に響いてきた。

『んにゃ〜 ……朝かにゃ？』

「うおっ！誰だ!？」

辺りを見ても声の発信源らしき人物は見つからない。

『うるさいにゃ……もうちょっと静かにしてほしいにゃ』

「なんだこれ……頭に響いてくる……しかも『にゃ』って」

『とりあえず出た』

もぞもぞと服の中で動くレオ。それに気づきすぐに出してやる。

「おっ、おはようレオ」

『おはようにゃ』

「うん？まだ響いてくるな……」

『まだ寝ぼけてるのかにゃ？』

「いやいや、俺は朝は強い方なんだぜ？」

『そんなにゃことはどうでもいいから早くご飯頂戴にゃ』

「なに！？姿を見せない奴にどうやってられと！しかもそんなもんねえし！」

『姿見せないって……目の前にいるにゃないか』

「は？目の前って……」

目の前の風景に目をやるが人らしき物は見えない。いるとしたら尻尾を不機嫌そうに横に振っている自分のペットであるレオだけである。

「んだよ……誰もいねえじゃんかよ」

『自分で名前つけたくせに忘れるとはなんて奴にゃ……』

「何のことだよ……名前なんてしらねえ……って、え？」

ふとレオに目を向けると悲しそうな顔でこちらを見ているレオがいた。

『レオって名前結構気に入ってにゃのに・・・』

「え？まさかさつきまで喋ってたのレオ？」

『当たり前じゃ私以外にどこにいるにゃ』

「え？」

『え？じゃにゃいにゃ・・・いままで一緒にくら』

「うおおおお！！マジか！？おまつ喋れるようになったのか！？」

『にゃあああああああああ！？』

嬉しさのあまりレオを抱きかかえその場でフィギュアスケーター顔  
負けなみに激しくスピニング。すごい笑顔で  
第三者がいたら不審人物として通報しているだろう。だがその第三  
者はこの場にはいない。

『落ち着くにゃ！！と、とりあえず下ろすにゃ！』

「おおつすまんすまん」

『ふう・・・まったく毎度のことだけどいい加減にしてほしいにゃ』

「何を言う！お前が可愛いのがいけないんだろが！」

『んにゃ理不尽な・・・そんなことより飯出すにゃ』

「ん、ちょっと待ってる」

レオの餌である「神のスプーン」を取りに行こうとするが、ここで重大なことに気づく

「あ”」

『？』

「ここ俺の部屋じゃなかった・・・」

落胆するネコ好きと何も知らないネコが草原の中心で佇んでいた。

『腹減つたにゃ〜・・・』

「そりゃ俺も一緒だ」

とりあえず食べ物、もとい人を探そうと南らしき方角に向かって進むことにした一人と一匹・・・

遠くを見ても町はおろか山も海も見えない。青々しい草がひたすらと続いている草原をひたすら歩いていく状況だ。

あれからすでに二時間以上は歩き続けている。時間的には朝食をすませ通勤・登校している時間帯だ。

「しっかし、どこまで続くんだこの草原は・・・」

『にゃんにもなくてつままないにゃ』

「いえてる」

それまで、お互いの日常での生活を題に雑談を交わしながら進んできたが会話をすることがなくなっただけではひたすら黙々と前に進むだけで両方ともに暇そうにしている。

「暇だな・・・」

『暇にゃ・・・』

「なにも見えてこないけど生きて帰れるのか？俺たち」

『五日以内になにか食わなきゃ死んじゃうにゃ・・・』

「どうせ死ぬならネコとボ○口（女性限定）に囲まれて死にたいな・・・」

『・・・』

他愛もない会話をして会話が尽きてダンマリに入り、また会話しては黙る。

そんなことを繰り返してさらに一時間・・・変化が訪れる。

カイ・・・

「ん？」

『どうしたにゃ？なんかあったかにゃ？』

「いや・・・なんか声が聞こえたような気がしたんだが」

気のせいだ、とレオに告げる。レオは興味がないのか「ふん」と呟いただけで再び前を見て歩きます。

だが、彼の頭には一つだけ気になることがあった。

「（なんかどつかで聞いたことがある気がするんだよね・・・）」  
まったく記憶に残ってないのだが、頭の隅になにか引っかかるものを感じた・・・

ボー・・・と考えていたが、「ニヤッ!!」「っというレオの声に意識が戻る。

『煙にや!煙が見えるにや!』

「えっ!?!マジか!」

前方に目を向けると、地平線にうつすらと灰色の煙があがっているのが見える。

「やった!これで飯が食える!」

『さっそく行くにや!』

煙の発生源らしき場所に時速50km/h並の速度で走っていく—  
人と一匹

これから待ち受ける災難を知らずに・・・

「くそっ・・・化け物が・・・」

そう悪態をつくのは、カムル村に住まう青年 アレク だ。

彼は非常に焦っていた、自分の状況に・・・

彼の目の前には今まで見たこともない魔物・・・というより生き物

(・・・)とも言い難いものと対峙していた。

人型をしたその物体は、全長が約4mもあるう巨大で、足が太い鉄柱のようなもので腕は大砲をそのままつけたようでありそして何よりも特徴的なのは頭部にある「目」のようなものだ。

一つ目でそして赤い色をしているその目は悪魔とも言えるようなもので生物ではありえない形をしている。

「うおおおおおおお!!!」

意を決してその異形に斬りかかる。

狙いは人間の膝に当たる部分にある接続部だ

ギャキイイイイイ！！！！

耳に金属同士が擦れあう音が聞こえた。

一度後退して斬りかかった部分に目を当てるが・・・

「やっぱり効果なしか・・・」

一言呟き、舌打ちをする。

膝の接合部に放ったアレクの渾身の一撃は少しの傷をつける程度で効果は皆無に等しかった。

いろんな場所にも斬り込んでみたが、結果はみな同じで大したダメージにはなっていないかった。

そして異形も反撃と言わんばかりに自身の右腕を振り下ろしてきた。それを右に飛び込む形で避けるが・・・

「なっ！」

空いていた左手をアレクに向けて鉄球のようなものを発射させた。咄嗟に剣を使って防御の体勢を取るが呆気なく吹き飛ばされる。

一瞬意識がなくなるが、激しい痛みによって再び意識を取り戻す。

「アレク！」

自分を呼ぶ声に痛みに耐えながらその声をする方に顔を向ける。

そこには目に涙を浮かべながら近づいてくる女性がいた。アレクの妻 シェリー だ。



激しい爆発音が響いた。

その音に驚き二人は目を見開いた。そこには左上半身を失った異形の姿が……

「ギギ……ギ……」

異形から発せられる痛々しい音が聞こえる。一体何が……と考え  
ていると

「あの……大丈夫ですか？」

年相応の声が聞こえその声が聞こえた方に顔を向ける。

そこには不思議な形をした筒を持っている少年とその少年の肩に乗  
っている小動物がこちらを気遣うような眼をして立っていた。

**第1話：起床そして襲撃（後書き）**

まず第一声、何この駄文・・・

やはり小説はムズイです（泣

後、いろんな設定も考えなきや（汗

主に主人公の名前とか、主人公の名前とか・・・

**修正中です**

諸事情で修正中です。  
申し訳ございません。



**修正中です（前書き）**

いきなりですいませんが、自身の身勝手な都合により文章を消させていただきました。

以前書いた文だと続きが書きにくいと判断しまして現在執筆中です。出来次第、投稿するしだいです。

本当に申し訳ありません。

修正中です

修正中です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2785k/>

---

無機物の召喚士

2011年10月6日19時51分発行